

上野の 寄り道 散歩道

第9回

「近代文学散歩」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある杜寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



1 幸田露伴「五重塔」

明治二十五年（一八九二） 技量は抜群だが世渡り下手な「のっそり十兵衛」が主人公。妹の延や幸という音楽家の兄でもあり、第二次大戦後まで長命を保った作家の代表作。

2 森鷗外「雁」

大正四年（一九一五） 医学を学ぶ大学生の岡田に慕情を抱く高利貸しの妾・お玉が、その想いを伝えることができないまま、岡田は洋行。女性のはかない心理描写を描いた作品。



上野から谷中にかけては近代文学の多くの名作の舞台になってきた。

JR鶯谷駅とJR日暮里駅の西側に広がる谷中霊園の中ほどに、幸田露伴（一八六七～一九四七）の「五重塔」のモデルとなった五重塔跡がある。腕利きの大工「のっそり十兵衛」が完成させた「感心寺」の五重塔が、落成式の前夜、大暴風に襲われたものの無傷でそびえていた。しかしモデルとなった天王寺の塔は昭和三十二年（一九五七）七月に心中による放火で焼失。いまはその跡地が残るのみである。

「山椒大夫」「高瀬舟」などで知られる文豪、森鷗外（一八六二～一九三三）は明治二十二年から二十四年まで池之端三丁目に住み、「雁」は不忍池から旧岩崎邸庭園のあたりが舞台になっている。「岡田の日々の散歩は大抵道筋が決まっていた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお蘭黒のような水の流れ込む不忍の池の北側を回って、上野の山をぶらつく」。無縁坂は鷗外の住まいからほど近く、その住居跡はいまホテルになり記念碑が建つ。樋口一葉（一八七二～一八九六）は下谷竜泉寺（現在の台東区竜泉）の長屋で荒物屋を営みながら作品を書いた。「文学界」に載せた「たけくらべ」が好評を博し注目されるも、二十五歳で夭逝してしまう。夜の上野の杜を描いた「十三夜」



3 樋口葉「十三夜」

明治二十八年（八九五年） 煙草屋の倅で、車夫になった貧しい高坂録之助と資産家の原田勇に嫁いだ幼なじみの阿闍が、夜の上野の杜で偶然に出会い、身の上を語り合う。

4 夏目漱石「野分」

明治四十年（一九〇七） 学生時代からの友人である高柳と中野、故郷で教職に就いていたが職を追われた道也先生。百円をめぐって出会った三人の作家にまつわる物語。



5 石川啄木「握の砂」

明治四十三年（一九一〇） 啄木が二十四歳のときに出版された第歌集。三行分けによる散文的なスタイルの短歌は、若い世代を中心に多くの追従者を生んだ。



6 石川淳「焼跡のイエス」

昭和二十年（一九四五） 石川は「善賢」で芥川賞を受賞して文壇での地位を確立。戦後は「焼跡のイエス」などの作品で太宰治、織田作之助らとともに「無頼派」と呼ばれて活躍した。



も、一葉らしい余情漂う名品だ。鷗外と並び称される文豪夏目漱石（一八六七―一九一六）も、上野を舞台にした「野分」を執筆している。「演奏台は遠かの谷底にある。近づいたためには、登り詰めた頂から、規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下りて、自然と通る挿鉢の底に近寄りねばならぬ。挿鉢の底は半円形を劃して空に向って広がる内側面には人間の塀が段々に横輪をえがいている」。この会場は東京音楽学校の奏樂堂である。石川啄木（一八八六年―一九一〇）は岩手県民村（現在の盛岡市玉山区洪民）から上京。第一歌集「握の砂」には、上野駅をうたった有名な短歌がおさめられている。「ふるさとの訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく」。東北の玄関口である上野駅を象徴する歌として□が置かれてきた。

「『さあ、きょうかぎりだよ。きょう一日だよ。あしたからはだめだよ。』と、おんなの金切声もまじって、やけにわめかたてているのは、殺気立つほどずさましいけしきであった」と、昭和二十一年（一九四六）七月の上野のガード下の情景を描くのは石川淳（一八九九―一九八七）の「焼跡のイエス」。現在の「アメヤ横丁」が鬧市だった時代を活写している。